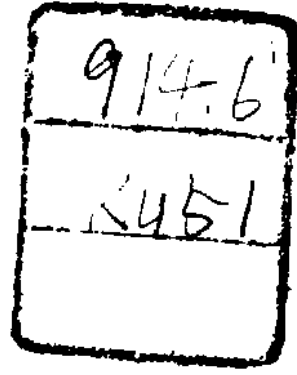


思想としての民主主義

蔵原惟人著

新日本新書=103



蔵原 惟人 (くらはら これひと)

1902年生

日本共産党中央委員会幹部会員，文化部長

主要著書 「思想と文化のたたかい」「革命と文化運動」「マルクス・レーニン主義の文化論」「若きレーニン1」「蔵原惟人評論集 (全7巻)」(新日本出版社刊)

思想としての民主主義

新日本新書 103

1970年6月20日 初版 ©

定価 280円

著者	蔵原惟人
発行者	松宮龍起

郵便番号102 東京都千代田区富士見2の13の14
発行所 株式会社 新日本出版社
電話 東京 (262) 4732
振替番号 東京 13681

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

[享有堂印刷納]

思想としての民主主義

蔵原惟人著

新日本新書=103

目次

I 私の読書遍歴……………8

ロシヤ文学と私……………13

乱読から批判的読み方へ……………27

読書のすすめ……………37

『古典文学』をどう学ぶか……………43

宮本百合子文学のもつ意義……………59

野呂栄太郎との数ヵ月……………63

ホー主席の思い出……………67

日本の近代文化・文学を考える……………72

——なにを受けつぎ発展させるか——

対談 蔵原惟人Ⅱ阿部知二

Ⅱ よみがえれ わだつみの像……………94

プロレタリアート独裁と民主主義……………97

文学者の自由ということ……………108

人民の立場にたつ民主主義文学とは何か……………115

——日本民主主義文学同盟の創立によせて——

Ⅲ レーニンをいかに学ぶか……………136

レーニンについて……………141

対談 蔵原惟人Ⅱ江口朴郎

レーニンからなにを学ぶか……………194

解題……………227

I

私の読書遍歴

私の幼年時代には父母から本を買ってもらうことがなく、小遣いももらわなかった。私はその頃の子供たちが読んでいた『少年世界』とか立川文庫とかいうものを読んだことがなかった。童話の本も読まなかった。ただ父が顧問になっていた大日本国民中学会という団体から『小国民』という雑誌を送って来ていたので、小学時代にはそれを読んでいた。百穂ひやくすいや素明の口絵が楽しかった。私をはじめ読んで読んだ単行本は小学六年生の時に兄の書架からそっと持ち出した鏡花の『高野聖』である。それから『中央公論』や『新小説』に出ていた花袋、潤一郎、未明、俊子などの小説を乱読した。蘆花の『自然と人生』や『藤村詩集』や花外訳『バイロン詩集』など読んだのもこの頃である。

中学一年の時にこれもまた兄の書架にあった矢口達訳のトルストイの『コサック』を読んだ。よくはわからなかったが、初めの方の描写にひどく感心してそれからトルストイの愛読者となり、十五歳ごろまでに当時訳されていたトルストイのほとんど全部とツルゲネフ、ゴン

チャロフ、ドストエフスキーなどを愛読した。『戦争と平和』は中学二年の時に感激して読んだ。学校ではいつの間にか私に「ロシア文学」というあだ名がついていた。

中学三年の終りごろに二葉亭の訳したアンドレエフの『血笑記』を読んですっかり気に入り、アンドレエフ、ソログロフ、ザイツェフ、メレジコフスキー、ついでブローク、ベールイなどロシア近代主義の作家や詩人に心ひかれた。この世界に私をひっぱり込んでいったのは昇曙夢しよむの『露国現代の思潮及文学』である。ポー、ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメ、サマン、レニエなどを耽読したのもその頃である。荷風の『珊瑚集』寛の『リラの花』大学の『昨日の花』白秋の『邪宗門』『東京景物詩』光太郎の『道程』朔太郎の『月に吠える』耿之介の『転身の頌』『黒衣聖母』などは当時の私の机上の書であった。鷗外訳『ファウスト』丙三郎訳『神曲』も愛読書であった。日本の作家でこの頃好んで読んだのは漱石、鷗外、三重吉、潤一郎、武郎、春夫など、哲学書ではニーチェの『悲劇の誕生』ベルグソンの『創造的進化』ヘフティングの『近世哲学史』など、文学論ではブランデスの『十九世紀文学の主潮』などに心ひかれた。またこの頃印象派以後のヨーロッパ美術に関する多くの著書も読んだ。

同時に私は中国の古典に興味をもった。中学で習った漢文にはあまり興味をもたなかった

が、その教科書によってはじめて李白を知り、『唐詩選』その他を愛読した。中学三年のころ代議士の選挙に落選して暇になった父から『文章規範』の素読を受けた。最も印象に残っているのはそのうちの「屈原すでに放たれて三年」にはじまる文章で、「蟬翼を重しとなし千鈞を軽しとなし、黄鐘は毀り棄てられ瓦釜は雷鳴し、讒人高く張りて賢士は名なし、ああ黙々たり」というあたり、父の講義にも熱がはいっていたせいもあって未だに忘れない。今日中国で屈原が再評価されているとき感慨深いものがある。

私をはじめて社会主義を知ったのは、中学三年の西洋歴史の時間に、担当の亀井高孝氏が、サン・シモンやフリーエやバクーニンやマルクスの話をした時である。この以前にユーゴの『レ・ミゼラブル』の映画や涙香訳『あゝ無情』を読んで革命というものに関心をもった。中学三、四年頃に義兄の本箱にあった瀬戸覚蔵の『東陲民権史』を読んで、日本にもこうした革命的伝統があったことをはじめて知って驚き、それ以来この書は私の愛書の一つとなった。箕作元八の『仏蘭西革命史』を読んだのもこの頃である。歴史の本では他に坂口昂の『世界における希臘文明の潮流』、『概観世界思潮』などを好んだ。

外国語学校でロシア語を学ぶようになってからは、はじめのうちはモデルニズムの作家、ついでロシアの古典、プーシキン、レルモントフ、ゴーゴリなどに興味をもつようになった。そ

れと関連してベリンスキーの文学論が私に大きな影響を与えた。文学論の上で私に決定的な影響を与えたのは、マルクス主義以前にはこのベリンスキーとブランデスである。

マルクス主義を本当に勉強するようになったのは外語卒業後軍隊にはいつてからである。ここで私ははじめはカウツキーや河上肇の著書の手引でマルクス主義の文献を読みはじめた。この時期が私の思想上の転換期をなしている。その後一九二五年の二月に二十三歳でソビエト同盟に渡り、そこでプレハーノフ、レーニンその他によってマルクス主義の社会、政治、芸術理論を学習し、またゴーリキー以下のソビエト作家たちの作品や文学理論も読んだ。その翌年の十月に帰国してからはプロレタリア芸術・文化運動や日本共産党の運動に参加し、一九三二年の四月に、三十歳で検挙された。

検挙されてから二年間の未決の間は種々様々の分野のひじょうに多くの本を読んだが、既決になってから一九四〇年十月に三十八歳で出所するまでの七年間は書物の制限などもあって主として中国および日本の古典を勉強した。中国のものでは先秦諸家のものをたいてい読んだが、そのうちで『論語』『老子』などの他には『墨子』『列子』『孫子』などにとくに興味をもった。日本のものでは記紀万葉をはじめとして、宇津保、源氏、平家などから西鶴、近松あたりまでを主に読んだ。

今私は日本訳『レーニン全集』の刊行委員に加わっている。私はこの機会にレーニンをもう一度精読したいと思っている。そして東洋の古典をもう一度ふりかえってみたいと思っている。

ロシア文学と私

(これはさいきんある出版のために書いた「私の読書遍歴」のうちからロシア文学に関する部分を抜萃したものである。題はかりに「ロシア文学と私」というふうにつけたが、主として読書に関するものとなったのはそのためである。)

私が教科書以外に最初によんだ書物は、たぶん小学校の六年生るとき兄の本箱からないしよ
でひきだして読んだ泉鏡花の小説『高野聖』であった。兄はそのころ数十冊の文学書をもつて
いた。父はおそらく数千冊の蔵書をもっていたが、それらは多くは洋書と漢籍と、政治、教
育、哲学などに関する邦書で、少年の私には手がとどかなかつた。『高野聖』はよくわからな
かつたが、こういう文学の世界があることを私ははじめてこの小説で知つた。

それから、そのころの『中央公論』にのっていた田山花袋や田村俊子や小川未明や谷崎潤一
郎などの小説を片っぱしから読むようになり、同時にそれと並行してこれも兄の蔵書のうちに
あつたトルストイの『コサック』やダンヌンチオの『巖の處女』などといったような翻訳物を

よんだ。とくにトルストイの『コサック』は、その中にある思想的内容を理解したわけではなかったが、その芸術的な表現や描写が私に強い印象をあたえ、それから私はトルストイの大きな愛好者になった。

トルストイの『戦争と平和』を通読したのは、私が十三、四歳のころであったであろう。私は年の暮に自分の部屋の窓をあけはなつて寒さも感ぜずに昂奮して『戦争と平和』に読みふけてゐる少年である自分の姿をなつかしく思い浮かべる。実をいうと私は自分の不勉強のせいで今にいたるまで『戦争と平和』を読みかえしていない。しかしそれでも私はこのころに読んだこの作品の個々の部分を今でもはっきりと覚えてゐる。

それから私は十五、六歳までのあいだに当時翻訳されていたトルストイの作品の大部分と、ツルゲネフ、ドストエフスキー、ゴンチャロフなどのおもな作品を読んだ。これらの偉大なロシアのレアリストたちの作品は私にふかい感銘をあたえ、私は友人たちとそれについて情熱をもつて語つた。そのために私の中学の友人たちはいつの間にか、私に「ロシア文学」というあだ名をつけてしまった。雑誌『トルストイ研究』がでて、それを愛読したのもこの頃であつたらうか。

これらの作家たちのヒューマニズムは今にいたるまで私に大きな影響をあたえており、私は

そのなかにでてくる主人公たちを心から愛した。しかしそれらの作品の社会的、思想的な内容を少年の私は十分に理解したわけではなかった。それが私がやがてこれらの作家から去ってふたたびそこに帰ってくるまでに大きな廻り道をしなければならなかったゆえんであるろうと思う。

私は十五歳のころに二葉亭の訳でアンドレエフの『血笑記』を読んだ。この作品は日露戦争のころに書かれた反戦的思想をもったもので、この作者としてはすぐれた作品の一つである。しかし私をおどろかしたのはその思想であるよりも、その表現であり、描写であった。私はそれからアンドレエフが好きになり、手にいるかぎりの彼の作品をあつめて読んだ。当時、谷崎潤一郎の作品などをのぞいては、主としてロシヤやフランスや日本の古典的なレアリストや自然主義者の作品を読んでいた私には、アンドレエフの作品はきわめて深刻で新鮮であって、それにくらべると古典的レアリストの作品は平凡で深刻でないようにさえ思われた。

アンドレエフにみちびかれて、私はロシヤやフランスの近代主義の文学にはいつていった。フランスその他の近代主義の文学熱を私にふきこんだのは、郷里の中学を卒業して出京し、そのころ私の家に同居していた私の従兄蔵原伸二郎である。その影響もあってポー、ボードレー、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボー、のちにはサマン、レニエなどの詩や小説を愛読し、